

世界史教育の方向性と大学教育：「歴史総合」の新設を展望して

徳橋 曜

世界史教育の方向性と大学教育：「歴史総合」の新設を展望して

徳橋 曜¹

The Future Direction of Education of the World History and the University Education: Viewing the Establishment of “General History (Rekishi-Sohgoh)”

Yo TOKUHASHI

摘要

2016年12月21日、文部科学省中央教育審議会から「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」が出された。これによって、2020年から新しい指導要領の施行と共に、幼稚園から高等学校に至るまでの学校教育のあり方が大きく変わることが決定した。その一貫として、小学校・中学校の社会科、高等学校の地理歴史科と公民科についても、抜本的な見直しが行われることとなる。特に高等学校の歴史教育については、従来の世界史A・世界史B及び日本史A・日本史Bに代えて、世界史と日本史とを融合させた「歴史総合」が共通必修科目とされ、これに接続する発展的な選択科目として「世界史探究」と「日本史探究」が設けられることになった。この新たな体制を目指して、高等学校の世界史教育のあり方が見直されると共に、これと接続する大学における歴史教育（なかんずく外国史教育）のあり方も検討を迫られ、また歴史学に対する学生の意識や志向も変化すると予想される。本稿では昨年度に引き続いて学生に対して実施したアンケートの回答に基づき、世界史教育の意義や高校と大学の歴史教育の関連性をめぐる彼らの意識を検討しつつ、2020年以降の世界史教育と大学の歴史教育のあり方を考察する。

キーワード：世界史，高等学校，大学，歴史総合，主体的・対話的で深い学び

Keywords : World History, High School, University, Historical Education, Active Learning

I. はじめに

2016年12月21日、文部科学省中央教育審議会が「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（以下「答申」）を公表した¹。「答申」の第1部「学習指導要領等改訂の基本的な方向性」では、幼稚園から高等学校に至る学校教育全体の現状とその課題、改善点等の方向性が述べられ、第2部「各学校段階、各教科等における改訂の具体的な方向性」では、各学校段階と各教科の課題や改善の方向性が列挙されている。これによって2020年度から施行される新たな学校教育の方向性が決定した。

その中で小学校・中学校の社会科、高等学校の地理歴史科と公民科については、「社会的事象に関心を持って多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させること」に重点を置いて、改善が目指されてきたにもかかわらず、以下のような課題があると指摘されている²。

・主体的に社会の形成に参画しようとする態度の育成

が、不十分である。

- ・資料から読み取った情報を基にして、社会的事象の特色や意味などについて比較したり、関連付けたり、多面的・多角的に考察したりして表現する力の育成が、不十分である。
- ・社会的な見方や考え方については、その全体像が不明確で、それを養うための具体策が定着するに至っていない。
- ・近現代に関する学習の定着状況が、低い傾向にある。
- ・課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた授業が、十分に行われていない。

そして、これらの課題を踏まえ、これからの時代に求められる資質・能力を視野に入れるならば、「社会との関わりを意識して課題を追究したり解決したりする活動を充実し、知識や思考力等を基盤として社会の在り方や人間としての生き方について選択・判断する力、自国の動向とグローバルな動向を横断的・相互的に捉えて現代的な諸課題を歴史的に考察する力、持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとする態度」など、国家及び社会の形成者として必要な

¹ 富山大学人間発達科学部

資質・能力を育むことが、社会科・地理歴史科・公民科には必要だというのである。そこから、社会科・地理歴史科・公民科の教育目標は、「公民としての資質・能力」の育成に置かれ、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」が三つの柱として示されている。そして、具体的な教育課程の改善事項として、「課題を追究したり解決したりする活動の充実」が求められるのである。

この方向性に沿った教育内容の充実・改善の一部として、高等学校の歴史教育については、現行の世界史 A・世界史 B 及び日本史 A・日本史 B に代えて、世界史と日本史とを融合させた「歴史総合」が共通必修科目として設けられ、2022 年度から実施されることとなった。「答申」の別添資料 3-8 によれば、この「歴史総合」は『グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者』を育成するために、「世界とその中における日本を広く相互的な視野から捉えて、近現代の歴史を理解する科目」であり、「歴史の推移や変化を踏まえ、課題の解決を視野に入れて、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察する科目」である³。同じく別添資料 3-9 に明示されているように、これは現行の世界史 A 及び日本史 A を受けた科目なのである⁴。

そして、これに接続する発展的な選択履修科目として「世界史探究」と「日本史探究」が設けられることになった。こちらは現行の世界史 B 及び日本史 B を継承した科目であり、『歴史総合』で習得した歴史の学び方を活用して、歴史に関わる諸事象の意味や意義等を広く深く考察し探究する」（同別添資料 3-10 及び 3-11）という位置づけであるらしい⁵。

1994 年度から世界史が必修科目となると共に世界史 A・B の二つの科目が設定されて（1989 年告示の学習指導要領による）、20 年以上が経過した。その間に浮かび上がってきたのが、世界史 A の教え方・扱い方の難しさである。世界史 A は、「近現代史を中心とする世界の歴史を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、現代の諸課題を歴史的観点から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う」ことを目標としている⁶。そのために時代横断的な視点も取り入れつつ、近代史に比重を置いた意欲的な構成・内容とされたが、必修となった世界史を相対的に少ない時間数で履修させるという目的もあったため、高等学校の現場では、必ずしも歴史に関心がある訳ではなく、受験上の必要性も感じていない、という生徒に履修させることも多い。生徒全員に A を履修させる一方で、世界史を大学受験科目とする生徒のみを対照とした B の授業を設ける高校もある⁷。

しかも、世界史 A は内容的に近現代史を中心とするためにより深く複雑で、実は高校生にとっては、「広く

薄く」学ぶ世界史 B よりも難しいうえ、2 単位の科目として設定されている。今回の答申において、「近現代に関する学習の定着状況が低い傾向にあること」が社会科・地理歴史科・公民科の課題とされている一因は、大学入学試験までを展望した高等学校の世界史教育の主流が、網羅的な内容を持つ世界史 B にある一方、近現代史中心の世界史 A がいわば「受験に不要な科目」と位置づけられている現状にある。今回新設される「歴史総合」は、こうした問題点を踏まえたものになるはずである。この科目のみが歴史の共通必修科目とされている点も、従来の世界史 A・日本史 A の位置づけとは異なる。しかしながら、世界史教育を取り巻く環境が変わらなければ、世界史 A の轍を踏む可能性もあろう。

こうした問題意識から、日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会は、2016 年 5 月に『歴史総合』に期待されるもの」と題する提言を公表した⁸。これからの歴史教育は、グローバルな視野で現代世界とその中における日本の過去と現在、そして未来を主体的・総合的に考えることを可能にするものでなければならないことを主張してきた日本学術会議の立場からすれば、従来の「世界史」と「日本史」を総合した新しい科目の開設は望ましいものである。しかし「歴史総合」の内容については、時代の流れに沿って学ぶことが難しくなる等の懸念があり、それを踏まえての提言である。ここでは①時系列に沿って学ばせ、主題学習を重視すること、②15～16 世紀以降の近現代を中心に学ばせること、③世界と日本の歴史を結びつけて学ばせること、④能動的に歴史を学ぶ力を身につけさせること、⑤大学における教員養成と現職研修の場において、知識中心の高校歴史教育のイメージを問い直し、新しい科目に相応しい実践的指導力を持った教師を育てること、⑥大学入試において「歴史総合」科目に然るべき位置を与えることが示された。

実際に 2022 年から施行される「歴史総合」がどのようなものになるにせよ、高等学校の世界史教育が根本的に見直されると共に、大学入試のあり方と大学における歴史教育（なかならず外国史教育）のあり方も検討を迫られることは間違いない。「歴史総合」のみを学んで大学に入ってくる学生が増えれば、歴史学に対する学生の意識や志向も変化すると予想される。加えて「世界史探究」や「日本史探究」を履修した学生に対しても、これらの科目がより探究を指向する内容となるであろうことから、大学での歴史教育・研究指導の相応の工夫や変化が必要となろう。2017 年 5 月に開催された第 67 回日本西洋史学会大会では、前述の日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会にも属する油井大三郎を中心に、小シンポジウム「思考力育成型歴史教育への転換と大学入試改革をどう進めるか」が設けられ、多くの参加者を得た。それは日本の西洋史学界における、これからの歴史教育に対する関心と不安の大きさを物語る。以下では、昨年度（2016 年度）に引き続いて学生に対して

実施したアンケートの回答に基づき、世界史教育の意義や高校と大学の歴史教育の関連性をめぐる学生の意識を検討しつつ、これからの世界史教育と大学の歴史教育のあり方について考察する⁹。

Ⅱ. 方法

本年度も昨年度と同様に、前期の授業の最終回の講義（7月末ないし8月初）で、次頁に資料として掲げるアンケートを実施した。対象としたのは以下の学部の講義4つと教養教育の講義1つである。

- ① 環境歴史学（対象1年生以上）
- ② ヨーロッパ地域史論（対象2年生以上）
- ③ 世界システム概論（対象2年生以上）
- ④ ネットワーク社会史論（対象2年生以上）
- ⑤ 西洋の歴史と社会（教養教育・対象2年生以上）

①では環境と人間との関わりや環境に対する意識という観点から、ヨーロッパおよびアメリカ合衆国の歴史を概観した。②は中・近世イタリア史に沿って一つのテーマを論じ、考えさせる講義で、本年度のテーマは「中世イタリア都市のアイデンティティと表象」であった。③はウォーラステインの近代世界システム論を援用した西洋史概説であるが、ヨーロッパ世界に軸足を置きつつも、「世界史」としての視野を意識している。筆者の所属する富山大学人間発達科学部には東洋史の専任教員がいないため、外国史に関わる講義は事実上、筆者の担当する西洋史関係の講義（他学部履修の形で東洋史の講義を1つ設定している）となる。それゆえにこそ、③の世界システム概論においては、アジアやアフリカも射程に入れた「世界史」の性格を意図的に持たせているのである。3つのいずれの授業も中学校社会・高校地歴の教員免許に関わる授業でもあるが、特に③の講義では、歴史を教える上での素養を学生に身につけさせることを意識している。④は「ソシアビリティ」・「ネットワーク」をキーワードに中世イタリア都市社会の人的ネットワークのあり方を考察し、社会が機能していくうえでの人間関係の重要性を考えていくものである。そして⑤は教養教育の講義として、人間発達科学部以外の学部の学生、特に理学部や工学部の学生も受講するものである。

アンケートの目的の一つは、昨年度からの調査の一貫としてデータを蓄積していくことにある。今後も数年間、同じ形式のアンケート調査を行う予定であり、数年分のデータを蓄積したうえで、分析を行う。また、昨年度の質問項目であまり意味がなかったと思われるものは外し、今回の新しい歴史教育の方向性に通じる質問項目を加えた。最終的には合計60名の回答を得た。回答者の学年の内訳は1年生7名、2年生42名、3年生5名、4年生以上6名である。

質問項目としては以下の17項目を設定した。

- 1) 学年

- 2) 高校での世界史履修の有無

この2項目について確認した後、以下3～13は「履修した」と回答した者に答えてもらう。

- 3) 世界史の履修事情
- 4) ～6) 世界史が好きだったか否かとその理由
- 7) ～9) 世界史で受験したか否かとその理由
- 10) 大学の西洋史の講義で、高校で世界史を学んだことが役に立ったと感じたことはあるか？（高校の世界史学習の「有用性」の意識）
- 11) 大学の歴史の講義は、高校までの世界史教育とつながっていると思うか？（高校の世界史教育と大学の歴史教育の関連性の認識）
- 12) 高校や大学の授業で「歴史を考える」とは具体的にどうすることだと思うか？（主体的な学び・知識偏重ではない歴史教育というものに対する学生のイメージや意識）
- 13) 過去の世界史学習でもっと学びたかった点、もっと積極的に学ぶべきだったと思う点

以下14～17は「履修しなかった」と回答した者に答えてもらうもの。

- 14) 高校で歴史関係の科目を履修したか？
- 15) 高校以外の場で世界史を履修したか？
- 16) 大学の講義で、世界史を学んでおけばよかったと感じたことはあるか？
- 17) 大学の講義以外で、世界史を学んでおけばよかったと感じたことはあるか？

質問2については本年度も60名中13名の世界史未履修者がいた。昨年度の調査では55名中10名の(18.2%)の未履修者がいたが、本年度の未履修者の割合はやや多い(21.7%)。13名のうちでは、世界史以外でも歴史関係の科目を履修していないと回答した者が4名いた。そのうち3名は教養教育の受講者なので、高校でいわゆる「理系クラス」に在籍した理学部ないし工学部の学生かもしれない。いずれにしても、必修であっても受験と関係ない＝学ぶ必要はないという思考あるいは進路指導方法が、少なくとも一部の高校には依然として存在しているということであろう。日本学術会議の提言の中で、大学入試において「歴史総合」という科目に然るべき位置を与えることが主張されているのは、こうした実情を考慮してのことである。どれほど工夫し、理念を込めて新設した科目であろうとも、「受験に関係ない」といった理由で軽んじられたり邪魔者扱いされたりすれば、期待された教育効果を生み出すことはない。

質問10と11は、学生の意識する歴史教育の「有用性」がどのようなものか、またどのようなことから、高校と大学の歴史教育のつながりが意識され得るかを知るために設定したもので、昨年同様の項目である。一方、質問12は、質問文でも強調しておいたように、文部科学省

資料 実施したアンケートの文面

「高校と大学の世界史・外国史教育に関するアンケート(2017年7月)」

このアンケートは高校における世界史教育と大学における歴史教育のあり方を考察する研究の資料として行うものです。このアンケートから得た情報は、所与の目的以外には一切使用しません。また個人が特定されることはありません。

質問には番号に○をつけて回答して下さい。また一部の質問には記述で回答して下さい。

- 1) あなたの現在の学年は？ ①1年生 ②2年生 ③3年生 ④4年生以上
- 2) 高校で世界史を履修しましたか？ ①した → 質問3~13へ
②しなかった → 質問14~17へ

以下の質問3~14には、質問2で①と回答した人が答えて下さい。

- 3) 高校での世界史の履修事情について
 - 3-a) 高校の何年次に履修しましたか？
①1年生の1年間 ②1年生から2年生の2年間 ③2年生の1年間
④2年生から3年生の2年間 ⑤3年生の1年間 ⑥それ以外 ()
 - 3-b) 履修したのは世界史AですかBですか？
①世界史A ②世界史B ③AかBか分からない ④その他 ()
 - 3-c) どのような内容でしたか？
①古代から近現代まで網羅的に学習した
②前近代(18世紀まで)を主に学習した
③近現代(19世紀以降)を主に学習した
- 4) 高校時代、世界史という科目が好きでしたか？
①好きだった ②どちらかといえば好きだった → 質問5へ
③どちらかといえば嫌いだった ④嫌いだった → 質問6へ
- 5) 質問4で①ないし②と回答した人にうかがいます。好きだった主たる理由は何ですか？
①内容が面白かったから
②内容に特に興味はなかったが、試験では点数が取れたから
③先生の個性や授業の進め方が自分に合ったから
- 6) 質問4で③ないし④と回答した人にうかがいます。嫌いだった主たる理由は何ですか？
①内容に興味を持てなかったから
②覚えることが多くて面倒だったから
③先生の個性や授業の進め方が自分に合わなかったから
- 7) 大学入試センター試験で世界史(AあるいはB)を受験しましたか？
①した → 質問8へ ②しなかった → 質問9へ
- 8) 質問7で①と回答した人にうかがいます。世界史を受験した理由は何ですか？

- ①世界史が得意だった（あるいは試験で点数が取れると期待できた）から
- ②高校での履修の都合上、世界史を受験科目に選択せざるを得なかったから
- ③その他

9) 質問7で②と回答した人にうかがいます。世界史を受験しなかった理由は何ですか？

- ①世界史が苦手だった（あるいは試験で点数が取れないと予想した）から
- ②世界史は苦手ではなかったが、より点数が取れると期待できる科目が他にあったから
- ③世界史を受験する必要がなかったから
- ④その他（ ）

10) 大学の西洋史の講義を受講するなかで、高校で世界史を学んだことが役に立ったと感じたことはありますか？

- ①ある → どんなことで役に立ったか、できれば具体的に書いて下さい
- ②ない

11) 大学における歴史の講義は、高校までの世界史教育とつながっていると思いますか？

- ①思う → どういう点でそう思うか、できれば具体的に書いて下さい
- ②思わない → その理由を、できれば具体的に書いて下さい

12) 次期学習指導要領が「主体的・対話的で深い学び」を重点と位置づけているように、大学を含めた学校教育において、「覚える」ことではなく「考える」ことが重視されています。では高校や大学の授業で、「歴史を覚える」のではなく「歴史を考える」とは具体的にどうすることだと思いますか？

()

13) 自分の過去の世界史学習を振り返って、もっとこういう点を学びたかった、あるいはもっと積極的に学ぶべきだったと思うことはありますか？

- ①ある → 具体的にはどういう点についてですか
- ②ない

質問2で①と回答した人は、以上で回答終わりです。ご協力ありがとうございました。

以下の質問14～17には、質問2で②と回答した人が答えて下さい。

14) 高校で歴史関係の科目を履修しましたか？

- ①日本史を履修した
- ②歴史関係の科目は全く履修しなかった

15) 高校以外の場（予備校等）で世界史を履修しましたか？

- ①した
- ②しない

16) 大学の講義を受講して、世界史を学んでおけばよかったと感じたことはありますか？

- ①ある → どんなことでか、できれば具体的に書いて下さい。
- ②ない

17) 大学の講義以外の機会、世界史を学んでおけばよかったと感じたことはありますか？

- ①ある → どんなことでか、できれば具体的に書いて下さい
- ②ない

質問2で②と回答した人は、以上で回答終わりです。ご協力ありがとうございました。

の提起する「主体的・対話的で深い学び」に関連し、「歴史を考える」ということについて、学生が具体的にどのようなものであるとイメージしているのかを知るために設けた。そして、質問 13 は高校時代の世界史学習を振り返った時の学生の意識を知るためのものである。

また、質問 14～17 は昨年度と同様に、世界史未履修者の実態と認識を知るために設けた。

Ⅲ. アンケートの結果から

アンケートの回答結果については次頁以下に表としてまとめたので、別途、参照されたい。ここでは、特に本稿のテーマに沿った項目とその結果だけを取り上げる。

質問 3-a) 高校の何年次に履修したか？

※特に注記しない限り、以下の各質問について、人数の割合の分母は世界史履修者の総数(47名)である。

- ① 16名 (34.0%) ② 4名 (8.5%)
③ 11名 (23.4%) ④ 9名 (19.1%) ⑤ 0
⑥ 2名 (4.3%) ⑦ 5名 (10.6%)

⑦の5名のうち1名は1年生と3年生で、2名は1～3年生の3年間で、1名は1年生でAを2～3年生でBを履修している。また1名は履修時期を「忘れた」とのことであった。

質問 3-b) 履修したのは世界史 A か世界史 B か？

- ① 23名 (48.9%) ② 18名 (38.3%)
③ 4名 (8.5%) ④ 2名 (4.3%)

④の2名はいずれもAとBの両方を履修していた。またAかBか覚えていない学生が4名いた。それだけ関心がなかったということであり、必修科目であるがゆえに仕方なく履修したという認識であろう。

質問 3-c) どのような学習内容であったか？

- ① 29名 (61.7%) ② 15名 (31.9%)
③ 3名 (6.4%)

世界史Aの履修者を含めて、大半の学生は高校で通史を網羅的に学んだ、あるいは学んだと自覚していることが判る。世界史Aは前近代についても学習内容も含みつつ、近現代史に比重を置いた科目であるが、やはり高校の現場では、世界史を学ばせる唯一の機会として網羅的に教える傾向にあるのかもしれない。

質問 4) 高校時代、世界史という科目が好きであったか？

- ① 11名 ② 17名 (①と②の合計 59.6%)
③ 14名 ④ 5名 (③と④の合計 40.4%)

質問 5) 好きであった理由

※分母は「好き」・「どちらかといえば好き」と回答した28名

- ① 16名 (57.1%) ② 4名 (14.3%) ③ 8名 (28.6%)

質問 6) 嫌いであった理由

※分母は「嫌い」・「どちらかといえば嫌い」と回答した19名

- ① 4名 (21.1%) ② 13名 (68.4%) ③ 1名 (5.2%)

※これ以外に①～③の総てを挙げた者が1名いた。

昨年度の調査と同じく、必ずしも世界史が高校生から嫌われる科目ではないということは指摘できよう。その一方で、質問 6 の嫌いであった理由として、19名中13名が②「覚えることが多くて面倒だったから」を挙げており、小川が従来から指摘しているように、網羅的に知識を教え込みたいという高校教師の善意が、生徒に負担感を与えている様子がうかがえる¹⁰。この点は、今回の「歴史総合」や「世界史探究」の新設に際しても考慮されており、知識だけを教え込むということは減ると思われる。しかしながら、言うまでもなく、歴史は問題解決型の学習に必ずしも馴染むものではない。「考える」「考えさせる」といっても、直接的には将来的な問題を解決するのではなく、既に起こったことを説明する論理や理由を見出そうとする作業になるからである。生徒の興味を削ぐことなく、歴史的事実の枠の中でどのように思考させるか、何よりも教師の力量が問われることとなろう。

質問 10) 大学の歴史の講義で、高校での世界史学習が役立ったか？

- ① 19名 (40.4%) ② 28名 (59.6%)

役立ったと感じた理由

- ・授業の理解。時代背景の理解。
- ・覚えていない部分もあるが、人物の名前や出来事をきいたときに「あれか」と少しでも思いあたる部分をもてる。
- ・出てくる単語に聞き覚えがあると話が頭に入りやすかった。
- ・人物名が出てきたら、その人の経歴がすぐに浮かぶこと。
- ・ISIL がどんな経緯でどの範囲の領土権を主張しているかが理解できた。
- ・各地域の大まかな流れが分かっているため、講義中の内容をより深く捉えるのに役に立った。
- ・大学の西洋史の授業は高校ですでに学んでいることを前提に、より深い話をされるから。
- ・歴史の流れや時代背景などをだいたい理解することができた点。
- ・高校で学んだ知識があるので、出来事の背景がつかみやすいから。
- ・歴史のおおまかな流れは分かっていたので、講義の内容を理解しやすくなった。
- ・聞いたことがある言葉が出てきた点。
- ・宗教関係がよく分かった。その時代の生活などを少し知ることができた。
- ・聞いたことがある単語が出てくるので、話が頭に入りやすかった。
- ・習った単語が出てくるから。
- ・内容をまだ覚えているので話が入ってきやすい。
- ・出来事や時代背景に覚えていることがあったので、流れをつかみやすかった。

表 アンケート回答結果

回答者	23a	3b	3c	4	5	6	7	8	9	10	10	(有用性)の内容	11(関連性)の内容	12歴史を考えるとは	13(高校での世界史学習について)の内容	14	15	16	17		
1	4	1	3	1	3	0	1	2	0	3	2	全く別の事を習わずでは無いので、高校のときと習った(聞いた)単語が出てきたりする、つながっていると感じます。	1	私はテストは暗記で勝負でした。なのでこう書かれたら非常に楽に取ります。「○」が起きたり「○」が起きたりとかでなく、どうしようもないって考えたか考えさせるところで記憶に定着させることでしょうか？	1	もっと積極的に学習すべきだったとは思っています。					
2	1	2																			
3	2	1	7	2	1	3	0	1	3	0	1	覚えていない部分もあるが、人物の名前や出来事を見たときに「あれか」と少しも思いあたる部分をもてる。	0			0	2	2	2		
4	2	1	3	1	3	0	1	2	0	3	2	授業理解。時代背景理解。	0	出来事の背景を教える。	1						
5	2	1	7	4	1	2	3	0	1	2	0	1	歴史の出来事	2	出来事の意義を考える。						
6	1	1	1	1	2	3	0	2	0	1	1	出てくる単語に聞き覚えがあると話が入りやすい。	2	あらかじめ用意された答えがあるものではなく、いくつかの資料から歴史を推測していくこと。	1	外交や産業の歴史ではなく、庶民の生活の様子についてもっと学びました。					
7	1	1	4	2	1	2	1	0	1	2	0	1	大きな流れをつかめていること、一部を深く掘り下げるのも理解しやすい。	1	情報を頼りにつめこむのではなく、そこから考察をする。	1	現象と現象をつなげて把握することができなかつたので、流れをもっとつかみかかっていた。				
8	4	1	3	1	2	2	3	0	2	0	3	2	大学の講義はくわしく、世界史の内容だと扱わない部分が多いと感じる。	2	資料などから読みとりを、自分で考えてみる。	2					
9	4	1	1	2	1	1	0	2	0	2	2	2	高校の歴史教育は暗記一辺倒だから。	2	「歴史の流れ」をよみとり、今の自分の人生に活かす。	2					
10	3	1	3	1	3	1	3	0	2	0	3	2	大学の講義には高校までの世界史教育の知識を前提に行われているものがある点。	1	生徒どうして話し合いをさせる。	1	最初から最後まで一通りの歴史を学びかかっていた。				
11	3	2																			
12	2	1	7	4	1	2	1	0	1	2	0	1	例えば、14世紀中葉のイタリアで下層市民の発言力が上がったのはなぜかということを中心で考えるとき、高校で習ったペストによる人口減少という知識があるおかげで、問題にのぞむこともできるから。	1	ペースとなる知識を覚えてから、特定の人物・団体が何故そうした行動をとったのかを考える、あるいはこの後、特定の人物・団体がどのような行動をするかを予測するというのをテキストカッパクションを通して行うこと。	1	センター試験に出るところだけ重要に学ばず、ニュースに出るところ(SNL、インドとベンガラデシュの問題等)も詳しく学ばべきだった。				
13	2	1	7	2	1	1	1	0	1	0	1	0	1	各地域の大きな流れが分かっているため講義内容をより深く捉えるのに役立つ。	1	歴史を学ぶ理由についても積極的に学ぶべきだったと思う。	1	歴史を学ぶ理由についても積極的に学ぶべきだったと思う。			
14	4	2																			
15	2	1	4	2	1	1	0	1	0	1	0	1	大学の西洋史の授業は高校で学んだことを前提に、より深い話をするから。	1	実験に出るようなことばかりじゃなくて、歴史の小話や、うわつから歴史ではないものを学びかかっていた。	1		1	2	1	2
16	2	2																			
17	2	2																			
18	4	1	1	3	1	2	1	0	2	0	1	2	1	1	2	1	2	1	2		
19	2	1	7	1	2	3	0	2	0	4	2	2	2	2	2	2	2	2	2		
20	2	2																			
21	2	1	1	1	2	2	0	2	0	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2		
22	2	1	3	2	1	3	0	2	0	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2		
23	2	1	4	2	1	2	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1		
24	2	1	4	2	1	3	0	2	1	2	0	1	1	1	1	1	1	1	1		
25	2	1	4	1	1	1	0	2	0	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1		
26	2	1	2	3	2	3	0	2	0	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2		
27	1	1	1	2	1	2	1	0	2	0	4	2	2	2	2	2	2	2	2		
28	2	2																			

29	2	1	3	1	2	4	0	1	2	0	3	2	2	高校では基本的に覚えるだけだった。	2	高校で学んだ知識を生かして大学ではもっと深く学ぶ点。	2	各時代で記述する出来事からその国の人々の意思を考えること。	0	2											
30	2	1	3	2	2	3	0	2	2	0	1	1	1	1	高校で学んだ知識を生かして大学ではもっと深く学ぶ点。	1	ある人物のある行動に対して、どうしてこんな事をしたのかというのを自分なりに考えること。	2	2												
31	1	1	1	2	1	2	3	0	2	0	3	2	2	2	細かいところまでやるから、高校だけの知識では難しかったから。	2		1	産業革命												
32	2	2																			2	2	2								
33	2	1	1	1	2	3	0	2	2	0	1	1	1	1	宗教関係がよく分かった。その時代の生活などを少し知ることができた。	1	歴史の一種の流れを暗記するのではなく、自分で組み立てることが出来る身につけること。	2	2												
34	2	1	1	1	2	3	0	2	2	0	3	2	2	0	0		2	世に影響を及ぼした人物や過去に存在した文明について知識を得て、それらのつながりやつながるものから自分の力で考えること。即ち、因果関係を考え、歴史の運動をたどって行くこと。	2												
35	3	2																													
36	2	1	1	1	3	0	2	2	0	3	2	2	2	1	高校で世界史の流れを学習したうえで、専門的な講義を受けることで歴史の前後関係がつかみやすかった。	1	歴史的事象が起こった原因、要因を考えたらうえて歴史を学習する。	2					1	2	1	2					
37	2	2																													
38	2	1	4	2	1	1	0	1	1	0	1	0	1	1	聞いたことがある単語が出てくるので、話が頭に入りやすかった。	1		2	その時代の人々の心情を考えることと狙います。	2											
39	2	1	2	2	2	4	0	3	2	0	1	2	2	2	2		2	出来事に対してなぜ起こったのか原因や背景まで考えること。	1	歴史の流れを理由「動機」しながら勉強していけばよかったです。											
40	2	1	4	2	1	2	3	0	1	2	0	2	2	1	高校世界史ではやらなかったところまで踏み込んだ。	1		2	歴史的事象から当事者の関係を考察する。	2											
41	2	1	2	1	2	2	0	2	0	2	2	2	2	2	高校では中国などのアジアを中心にやっていたから。	2		0	2												
42	2	1	3	1	2	2	0	2	0	2	2	2	2	2	2つの歴史の中の出来事ではあるけれども、高校の授業ではあまり触れなかったことが多いので、とつがあまりつまらない。	2	歴史上の出来事について、なぜこういうことがあったのかを考えること。	2													
43	2	1	1	1	2	2	0	2	0	3	2	2	2	1		1		2	出来事について、その時代の背景を見て、それが起きた理由を述べることなど。	2											
44	2	1	3	1	2	1	0	2	0	3	2	2	2	2	高校の授業は要点をまとめたもので、詳しくはないから。	2		2	歴史は当然、同じく文書の発見で根本からくつがえりたりするので、自分で考えるのが大事。	2											
45	2	1	1	1	3	0	2	2	0	1	2	2	2	1	さらに深くまで詳細に描かれている。	1		2	どういう流れでその事象が起こったのか、因果関係を考えること。	2											
46	2	1	1	1	2	1	0	2	0	2	2	2	2	2	より具体的だったから。	2		2	時代の流れをつかむ。	2											
47	2	1	3	1	1	3	0	2	2	0	3	2	2	2	大学の講義の内容と高校の内容が似ているから。	1		2	その歴史が起こった理由を考える。	2											
48	1	3	2	1	3	0	2	0	1	1	2	0	1	1	高校までの内容をより詳しく習っているから。	1		1	時代背景やそのときに活躍した人物がとった行動の経緯などを考えること。	1	歴史の流れを理由「動機」しながら勉強していけばよかったです。										
49	1	6	2	1	1	1	0	1	1	0	1	0	1	1	内容をまだ覚えていたのと話が入ってきやすい。	1		2	あることがらについて、なんでこうなるのか、なんでこれをしたのかを学び、考えることで、今の時代にも適用するものを学びとること。	2											
50	3	1	2	1	3	0	2	2	0	3	2	2	2	2		1		2	出来事における背景や立場から妥当性を測る事。	1	歴史的な出来事が起こるに至った動機。										
51	3	1	3	1	3	2	1	0	2	0	3	2	2	2	高校の世界史で学んだことを覚えていない。	2		2	現代の問題を関連づけたりする。	2											
52	4	1	4	2	1	1	0	1	0	1	2	0	1	1	出来事や時代背景に覚えていたことがあつたので、流れをつかみやすかった。	1		0	2												
53	2	1	1	2	2	4	0	4	2	0	3	2	2	2	1	似たようなものだったから。	1		0	2											
54	2	1	4	2	1	3	0	2	1	2	0	1	1	1		1		0	2												
55	2	1	6	1	3	4	0	1	2	0	3	2	2	2		2		0	2												
56	2	2																	0	2											
57	2	1	1	1	2	1	0	2	1	0	2	0	3	1	基礎的知識が役に立った。	1		2	2												
58	2	2																	2												
59	2	1	1	3	1	4	0	2	0	4	1	0	1	1	聞いたことがあるワードがいくつかあり、それについて詳しく知れた。	1		2	2												
60	2	2																	2												

- ・基礎的知識が役立った。
- ・聞いたことがあるワードがいくつかでてきて、それについて詳しく知ることができた。

昨年度の調査でも同様であったが、学生は高校で教わって覚えていたことが大学の講義で出てきた、高校で学んだことを踏まえた講義内容に出会って、高校で学んだことに有用性を感じたといった程度の意識である。

質問 11) 大学の歴史の講義と高校の世界史の関連はあると思うか？

- ① 27名 (57.4%) ② 17名 (36.2%)
無回答 3名 (6.4%)

関連があると思う理由

- ・全く別の事を習うわけではないので。高校のときに習った(聞いた)単語が出てきたりすると、つながっていると感じます。
- ・歴史の出来事。[高校と大学の双方の授業で、同一の史実が扱われたということか？]
- ・大きな流れがつかめていることで、一部を深く掘り下げて理解しやすい。
- ・大学の講義には高校までの世界史教育の知識を前提に行われているものがある点。
- ・例えば、14世紀中葉のイタリアで下級市民の発言力が上がったのは何故かということ独力で考えるとき、高校で習ったペストによる人口減少という知識があるおかげで、問題にのぞむことができるから。
- ・高校までの世界史を基礎にした上で講義の内容が構成されていると感じたから。
- ・大学の内容は高校の内容をさらにくわしく教えてもらうから、基礎がわかっていないといけない。
- ・軽く概要に触れた高校世界史を大学の講義でより深く掘り下げたから。
- ・大学における歴史の講義が高校までに習った世界史の応用であるという点。
- ・小・中・高校は浅く広く、大学は地域ごとに深く、みたいなイメージがあるから。
- ・高校の知識をもとに、当時の人々の考え方などを学んでいくという点。
- ・高校の内容が基礎になると思います。
- ・高校で学んだ知識を生かして大学ではもっと深く学ぶ点。
- ・高校で世界史の流れを学習したうえで、専門的な講義を受けることで歴史の前後関係がつかみやすかった。
- ・高校世界史ではやらなかったようなところまで踏み込んだ。
- ・さらに深くまで詳細に描かれている。
- ・大学の講義の内容と高校の内容が似ているから。
- ・高校までの内容をより詳しく習っているから。
- ・大学でより深く学べるから。
- ・おおよその出来事の流れは高校で覚えさせられたものだったから。
- ・似たようなものだったから。

- ・基礎的知識が役立った点。
- ・高校で習ったものをより詳しく学ぶことができるから。

関連がないと思う理由

- ・高校の世界史は自分で考えるのではなく、答えを暗記するもので、大学は自分で考えるものだから。
- ・大学の講義はくわしすぎて、世界史 A の内容だと扱わない部分が多いと思うから。
- ・高校の歴史教育は暗記一辺倒だから。
- ・今回の講義とは時代が違っていったから。
- ・高校までの世界史とは分けて認識しているから。
- ・高校で何をやったか忘れていたので思いようがない。
- ・着眼点が違うから(世界史 A だったので細かいところはやっていないから)。
- ・高校では基本的に覚えるだけだった。
- ・細かいところまでやるから、高校だけの知識では難しかったから。
- ・高校の時の世界史の内容を覚えていない。
- ・高校では中国などのアジアを中心にやっていたから。
- ・1つの歴史の中の出来事ではあるけれども、高校の授業ではあまり触れなかったことが多いので、2つがあまりつながらない。
- ・高校の授業は要点をまとめたものなので、詳しくはないから。
- ・より具体的だったから。
- ・[高校の世界史で学んだことを] 覚えていない。

関連があると思う理由については、質問 10 に対する回答と同じく、比較的単純な内容の類似性や連続性によって、大学の講義が高校からつながっていると感じる学生が多い。無論、これは悪いことではない。まさに大学の講義は高校で学んだことを土台にするものと、これまで多くの大学教員が考えてきたからである。これに対して、関連がないと思う理由として回答者が挙げている内容からは、少なくとも学生達の主観的には、高校時代の世界史はただ知識を覚えさせられたという意識が強いことがうかがわれ、それゆえにこそ今回の抜本的な歴史教育の見直しが提起されたことがうなずける。

質問 12) 「歴史を考える」とはどのようなことだと思うか？

- 回答者 39名 (83.0%) 無回答者 8名 (17.0%)

- ・「歴史の流れ」をよみとり、今の自分の人生に活かす。
- ・あらかじめ用意された答えがあるものではなく、いくつかの資料から歴史を推測していくこと。
- ・あることがらについて、なんでこうなるのか、なんでこれをしたのかを学び、考えることで、今の時代にも適用するものを学びとること。
- ・ある人物のある行動に対して、どうしてこんな事をしたのかというのを自分なりに考えること。
- ・いろんな見方から昔に起きた出来事を見てみる。
- ・各時代で起こる出来事からその国の人々の思想を考えること。
- ・現代の問題を関連づけたりする。

- 時代の流れをつかむ。
- 時代背景やそのときに活躍した人物がとった行動の経緯などを考えること。
- 小中学校で学んだことをさらに発展して考えることだと思う。
- 情報を頭につめこむのではなく、そこから考察をする。
- 資料などから読みとりをし、自分で考えてみること。
- 生徒どうして話し合いをさせる。
- その時代の人々の心情を考えることだと思います。
- その出来事における背景や立場から妥当性を測る事。
- その出来事について、その時代の背景を見て、それが起きた理由を述べることなど。
- その歴史が起った理由を考える。
- 出来事に対してなぜ起ったのか原因や背景まで考えること。
- 出来事の意味を考える。
- 出来事の背景を教える。
- どういう流れでその事実が起ったのか、因果関係を考えること。
- どうしてこういう風な歴史がつくられたのか、その背景や人物像を実際にあった出来事から推察すること。
- なぜその出来事が起きたのか、歴史的背景や歴史的事実から考察すること。
- 一つの起った事象を過程から考えて結果的にその事象が起きたと考えること。
- 複数の出来事を流れで考えていくこと。
- ベースとなる知識を覚えてから、特定の人物・団体が何故そうした行動をとったのかを考える、あるいはこの後、特定の人物・団体がどのような行動をするか予測するというのを、ディスカッションを通じて行うこと。
- 昔の人の苦労や苦難について学び、それを参考に現代に生かしていく。
- 世に影響を及ぼした人物や過去に存在した文明について知識を得て、それらのつながりがいかなるものかを自分の力で考えること。即ち、因果関係を考え、歴史の道筋をたどって行くこと。
- 歴史上の出来事について、なぜこういうことがあったのかを考えること。
- 歴史上の出来事をただ覚えるのではなく、そこから背景や状況を自分なりに考えること。
- 歴史的事実が起った原因、要因を考えうえて歴史を学習する。
- 歴史的事実を前に過去の個人の心情まではよく分からないが、なるべく客観的な当時の文献などから、どのような行動をとったかなどの推測。
- 歴史という過去から、現在直面している問題を解決するためのヒントを得ることだと考える。
- 歴史の一連の流れを暗記するのではなく、自分で組み

立てることができる力を身につけること。

- 歴史の事象から当事者の関係を考察する。
- 歴史の流れには、そこに至るまでの経緯が少なからずあると思うから、出来事を点として覚えるのではなく、線として流れを考えるということだと思う。
- 歴史は当然、何らかの文献の発見で根本からくつがえったりするので、自分で考えるのが大事。
- 私は、高校で世界史は必修の1年生のときしか受けませんでした。テストは暗記で勝負でした。なので、こう言われると非常に悩みます。ただ「〇〇年に〇〇が起きた」とかでなく、どうしてそうなったか考えさせることで覚えて記憶に定着させることにつながるでしょうか？

多くの学生は比較的単純に歴史的事項の暗記に対置させて、歴史的事実同士の因果関係や背景を考えることを「歴史を考える」ことであると認識している。そのこと自体は間違いではないが、どのように「考えるのか」を意識させる必要がある。また、「生徒どうして話し合いをさせる」、「ディスカッションを通じて行う」といった回答は、講義中に実施した複数の史料から史実を組み立ててみる試みや、そうした史料から引き出した推論に関するディスカッションの試みを反映していると考えられる。勿論、高校までの学校教育でアクティブ・ラーニングあるいはそれに類した形での授業を受けた経験を反映している可能性もあるが、同じ回答者の質問11や13に対する回答を参照すると、その可能性は低い。

質問 13) 世界史学習を振り返って、学びたかった点やもっと積極的に学ぶべきだったと思うことはあるか？

① 16名 (34.0%) ② 30名 (63.8%)

無回答 1名 (2.1%)

具体的な内容

- 世界史で習った言葉で覚えているのが「フレンチ・インディアン戦争」くらいなので、もっとまじめに学習すべきだったとは思っています。
- 外交や産業の歴史ではなく、庶民の生活の様子についてもっと学びたかったです。
- 事象と事象をつなげて把握することができなかったで、流れをもっとつかみたかった。
- 最初から最後まで一通りの歴史を学びたかった。
- センター試験に出るところだけ重点的に学びのではなく、ニュースに出るところ (ISIL, インドとバングラデシュの問題等) も詳しく学ぶべきだった。
- 歴史を学ぶ理由についてもっと積極的に学ぶべきだったと思います。
- 受験に出るようなことばかりじゃなくて、歴史の小話や、うわつらの歴史ではないものを学びたかった。
- 各国における文化がどのように発展してきたかという点。
- 全地域を通じた横のつながりを意識する点。
- 第一次世界大戦～太平洋戦争の状況。
- それぞれの歴史においての人々の価値観。

- ・産業革命
- ・歴史の流れを理由〔理解?〕しながら勉強していけばよかったと思う。
- ・覚えようと授業を聞くべきではなかった。
- ・歴史的な出来事が起こるに至った過程。

この質問に対して、学びたかったものがあると回答した学生達は、様々な観点から高校時代の自分の学習姿勢と高校の世界史教育のあり方を批判している。高校で学んだ知識を覚えていることによって、その知識が大学の講義で役に立ったと感じたり、高校の世界史の授業と大学の歴史の講義との関連性を認識したりする反面、大学入試のために覚えただけだったということへの後悔を表明する学生達の存在を、我々は軽視してはなるまい。

Ⅳ. 学生の認識と「考えさせる」歴史

以上のアンケートの自由記述から、学生のうちの少なくとも半数程度の者達は、半年間の講義を通じて、歴史学のあり方を考える機会があったと考えられる。しかしながら、筆者としては講義の働きかけは必ずしも成功しなかったと考えている。教養教育の講義を含めて、大半の筆者の講義では年度当初に、歴史学の本質を論じている。即ち、史料の解釈に基づいて構築される歴史像にとって主観性は不可避であること、教科書や概説書で記述される「歴史」は、緻密な実証の結果として、その妥当性が多くの人間の間で共有され、コンセンサスとして成立した歴史像であることなどを強調したうえで、具体的な講義に入り、また授業中であっても、ときにくどいほどに史料の問題に触れているのである。質問12に対する回答で、「資料」(史料)や「文献」に言及したものがいくつか見受けられるのは、講義で得たそうした認識を示しているが、逆に、それでもこの程度の認識にとどまっているとも言える。

実はアンケート回答者の通し番号のうち、No.19以降の回答者は教養教育の受講者であり、No. 18までの回答者は学部専門の講義(環境歴史学・世界システム概論・ヨーロッパ地域史・ネットワーク社会史論)の受講者である。複数の講義を重複して履修している学生が多く、そうした学生には、履修しているいずれかの授業でアンケートに回答した場合には、他の授業では回答しないように指導したので、受講者の延べ人数に比して回答数は少ない。その回答者の質問12に対する回答を見ると、No. 19以降の回答者(教養教育の受講者)に比べて、歴史学のあり方に関する理解が進んでいる。受講者が多い教養教育の授業では、講義中のそうした実践が困難であったため、順次、史実について自分の意見を言わせた程度で、ディスカッションなどはしていない。

一方、専門の講義、特に環境歴史学では意図的にそうしたディスカッションや史料解釈の作業の機会を増やした。たとえば、『森のヨーロッパ』の現実」と題した3

回目の講義では、現在のベルギー東南端にあるアルデンヌの森について、9世紀に成立した聖フェルトゥス第一奇蹟伝第三挿話を読ませ、『逸話から推定されるアルデンヌ地域の9世紀中葉の状況を書き出し、根拠となる部分に下線を引く』という作業をさせた。さらに、各自の推論を発表させて解説をした後に、同時期にアルデンヌの森の中を歩いていたと推定されている舗装道路ヴィア・マンズエリスカの考古学的調査の結果の一部を示して、道路の目的を推測させるということも試みた。また5回目の「中世都市の生活環境」では、中世都市の生活環境を一通り説明してから、15世紀の人文主義者レオナルド・ブルーニが書いた「都市フィレンツェ礼賛」という文章と、同時期のフィレンツェの都市法の規定とを比較・参照させながら、『このブルーニの文章からどんなことを読み取れるか?その根拠となる文中の語や表現を挙げながら考えてみよう』という課題を与えた¹¹。こうした講義での経験が、歴史学というものへの学生の認識に反映していると考えられる。

Ⅴ. おわりに

多くの歴史家や論者が、歴史は暗記の学問ではないと言いつけてきたが、歴史を考察するうえでの基礎的知識は、まず自分の中に持っていなければならない。高等学校までの歴史教育はそうした共有される基礎知識を修得させるという機能も持っていたはずであるが、今はその機能自体が大きく見直されつつある。

特に今後、高等学校の歴史総合の授業においては、たとえば、複数の教科書の記述を比較して、たとえ教科書であっても、その書き手や出版社の意図・見解によって、そこに描き出される歴史像に揺れが生じることを認識させることが重要になっていくかもしれない¹²。これまではそうした作業は、むしろ大学に入ってから講義で体験するものだったのである。その一方で、これまで高校で基礎的知識を身につけてきたことを一応の前提としてきた大学の歴史教育も、変わらざるを得ないであろう。勿論、入学者選抜において問われる知識・学力も、従来と同じではあり得ない。今後の議論が新しい歴史教育のあり方をどのように作っていくか、特に高等学校の「歴史総合」と「世界史探究」がどのような科目になるか、引き続き注目すると共に、それに対応する大学での歴史教育のあり方を検討していかなければならない。それはまた、歴史を教える学校教員をどのように養成するか、という問題にもつながっていく。

文献

小川幸司(2009)：「苦役の道は世界史教師の善意でしきつめられている」『歴史学研究』859, 191-200頁
大学の歴史教科書を考える会(2016)『わかる・身につ

く歴史学の学び方』, 大月書店

徳橋曜・小林真 (2016) : 「高等学校の世界史教育と大学の歴史学—歴史教育の接続の観点から—」『富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要教育実践研究』, 第 11 号

徳橋曜 (2017) : 「住民の福利と健康のために—中世イタリヤ都市の生活環境をめぐる史料」『歴史と地理』701, 山川出版社, 26-33 頁。

日本学術会議 (2016) : 『『歴史総合』に期待されるもの』 (<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-t228-2.pdf>) (2017 年 8 月 15 日最終閲覧)

文部科学省 (2009) : 『高等学校学習指導要領 (平成 21 年 3 月)』 (http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afielddfile/2011/03/30/1304427_002.pdf) (2017 年 8 月 29 日最終閲覧)

文部科学省中央教育審議会 (2016a) : 『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)』 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afielddfile/2017/01/10/1380902_0.pdf) (2017 年 8 月 20 日最終閲覧)

文部科学省中央教育審議会 (2016b) 『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申) 別添資料』 (http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afielddfile/2017/01/10/1380902_3_1.pdf)。

注

¹ 文部科学省中央教育審議会 (2016)。

² 同上, 132 頁以下。

³ 文部科学省中央教育審議会 (2016b), 18 頁, 別添 3-8。

⁴ 同上, 19 頁, 別添 3-9。

⁵ 同上, 20-21 頁, 別添 3-10 及び 3-11。全体的なイメージとしては, 文部科学省初等中等教育分科会教育課程部会の高等学校の地歴・公民科科目の在り方に関する特別チームから出された資料 10-1 (2016 年 6 月 27 日) が分かりやすい (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/062/siryo/_icsFiles/afielddfile/2016/08/01/1373833_10.pdf)。

⁶ 文部科学省 (2009), 18 頁。

⁷ 昨年度のアンケート調査では, 回答者の 15.2% に当たる 7 名が A と B の両方を履修していた。徳橋・小林 (2016), 150 頁を参照。今回のアンケート調査では回答者 60 名のうち 2 名 (3.3%) のみが, これに該当する。

⁸ 日本学術会議 (2016)。

⁹ 昨年度の調査とそれに基づく考察については, 徳橋・小林 (2016) を参照のこと。

¹⁰ 小川幸司 (2009), 191 頁。

¹¹ Cf. 徳橋 (2017)。

¹² 大学の歴史教科書を考える会 (2016), 2-34 頁。

(2017 年 8 月 31 日受付)

(2017 年 10 月 4 日受理)